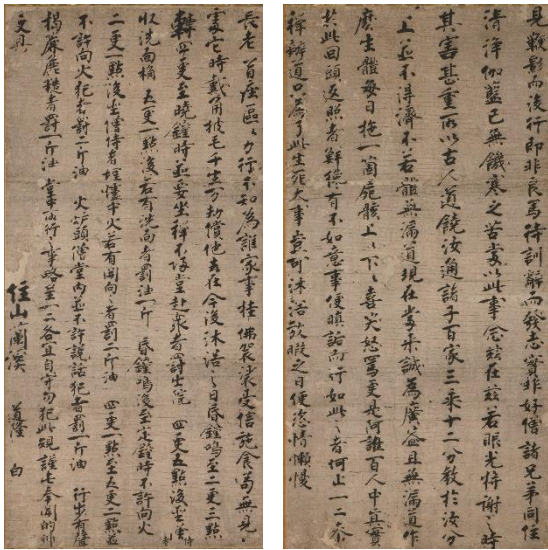


書跡・典籍

書跡とは本来筆跡を意味しますが、転じて墨と筆で書かれた書そのものを指します。僧侶、特に禅僧によって書かれた墨跡と、和様の書で主に平安から鎌倉時代頃に書かれた古筆に分けられます。鎌倉は禅宗寺院がととても多いため、鎌倉にある書跡のほとんどは墨跡です。

一方、典籍は和書・漢籍・仏典に分けられ、それぞれ筆で書かれた写本だけではなく木版で刷られた版本も含まれます。和書は日本で作られた書物で、『吾妻鏡』などの史書や物語、和歌集などがあります。漢籍は中国などで作られた、もしくは漢文学を学んだ日本人が書いた書物です。仏典は仏教に関する書物で、経典やその注釈書、高僧による著述、僧侶が仏教を学んだり祈祷を行ったりするために書き写した聖教などがあります。様々な宗派の寺院があった鎌倉には、特に仏典が豊富にのこされています。

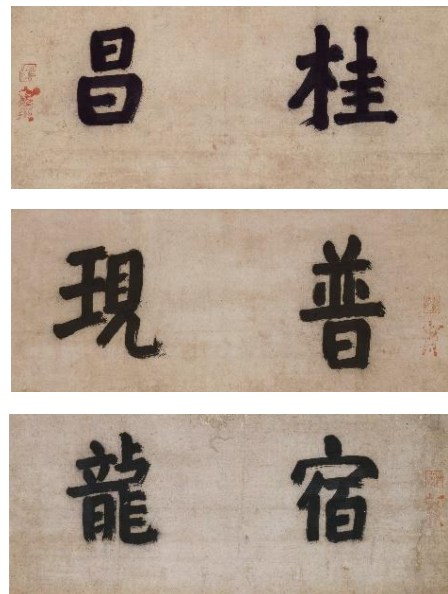


蘭溪道隆墨蹟 法語規則

国宝 建長寺蔵 鎌倉時代

各縦 84.8cm×横 40.9cm

建長寺の開山である蘭溪道隆の自筆の墨跡です。「法語」(右)では僧侶たちに対して修行上の戒めが述べられ、「規則」(左)には僧堂における生活上の作法や、規則を守れなかった場合の罰則が記されています。建長寺の草創期を築いた蘭溪道隆の、戒律に対する厳しさがうかがえます。



足利義満額字

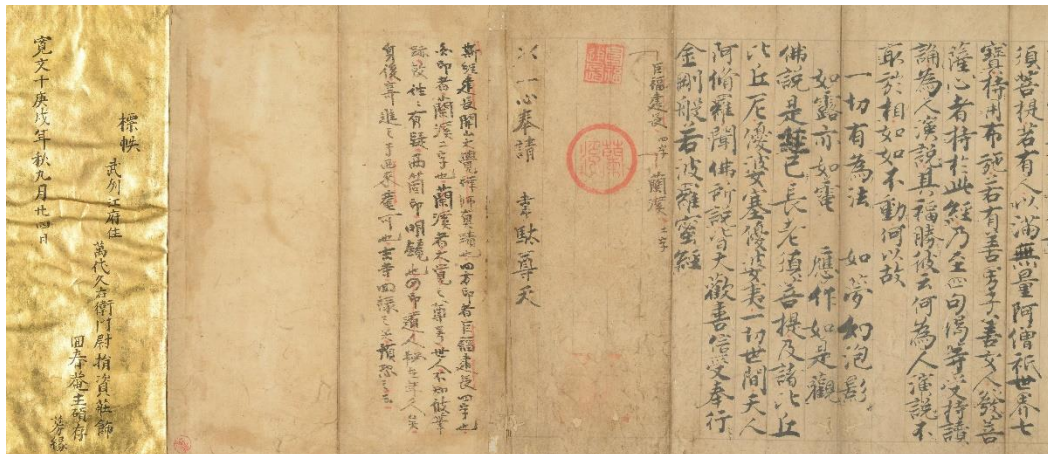
重要文化財 円覚寺蔵 室町時代

桂昌 縦 33.6×横 80.5cm

普現 縦 33.3×横 85.0cm

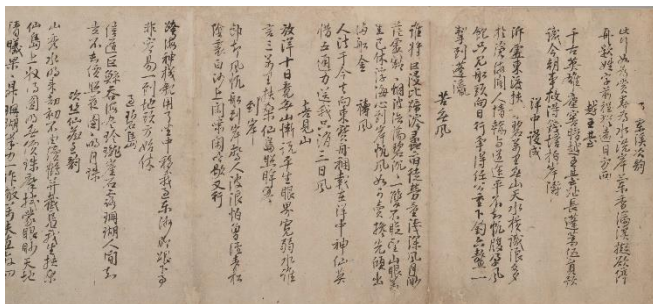
宿龍 縦 33.3×横 80.6cm

足利義満が円覚寺正統院殿堂に書き送った自筆の墨蹟です。義満が出家した応永2年(1395)頃の筆と推定されます。「桂昌」は祖師堂、「普現」は土地堂、「宿龍」は客殿をあらわしています。円覚寺は応安7年(1374)に火事に見舞われており、その後の復興に際して書かれたと考えられます。



金剛般若經 重要文化財 建長寺蔵 鎌倉時代 縦 23.1×横 8.5cm

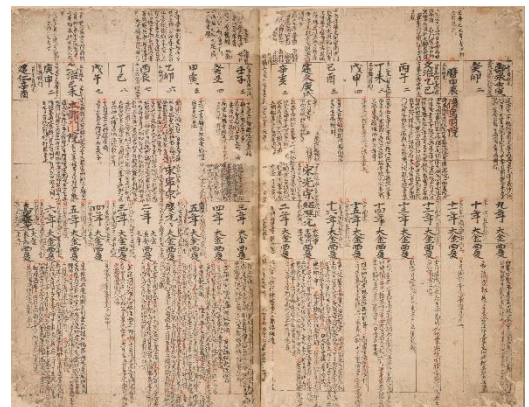
蘭溪道隆自筆の經典で、末尾には「巨福建長」「蘭溪」という2つの朱印がおされています。折本に装幀され、1ページ5行17字で書かれています。端正かつ実直な文字で、蘭溪道隆の人柄があらわれているかのようです。この經典は、弘治3年（1557）に蘭溪道隆の塔頭である西来庵に寄進され、今に伝えられています。



東帰集

重要文化財 報国寺蔵 鎌倉時代
冊子 縦 26.4×横 20.5cm / 卷子 縦 24.7×横 115.2 cm

報国寺開山である天岸慧広の詩集です。現在は冊子と卷子にまとめられ、どちらも天岸の自筆と伝えられています。天岸は嘉暦元年（1326）から3年間中国に留学しており、留学中から帰国時、帰国後にかけて作った漢詩が収められています。



和漢年代記

重要文化財 建長寺蔵 室町時代
各 縦 39.0×横 27.3cm

和（日本）と漢（中国）で起こった出来事を記した年表です。上下2冊からなり、上巻は日本の有史以前、下巻は欽明天皇3年（542）から永徳元年（1381）にかけての記事を載せています。中世の日本については、鎌倉地域に関する内容や、この年代記独自の記事が見られ、貴重です。